

上原 美術館 通信



編集・発行 公益財団法人上原美術館
2025年7月5日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



伊豆は13市町で構成されています。本展はこのうち、未だ当館の調査が及んでいない沼津市を除く12の市町にある寺院や地域のお堂から、素朴ながら個性的で魅力的な仏像32体を厳選して展示する企画展です。

伊豆屈指の禅宗の名刹、伊豆市修善寺の修禅寺からは、薬師如来像の左右に控える、日光菩薩像、月光菩薩像(写真1)をご出展いただきました。像高30cmほど。2体とも像の全てを一材からつくる漆黒の仏像です。薬師如来の脇侍は日光菩薩と月光菩薩ですし、向かって右の像の髻の前には金色の日輪、左の像には月輪(三日月)が彫られているので、間違いなくこの二尊のはずなのですが、太くがっしりとした体躯、豪快な着衣の表現、上部が欠けているものの、高く翻っていたらしい天衣…こうして見て行きますと、優美な菩薩というよりむしろ仁王像のようです。さらに頭部を横から見ると首が前にぬっと突き出ている、この表現もあり例を見ません。菩薩像らしからぬ不思議な造形ですが、味のある仏像です。



1. 日光菩薩・月光菩薩像(室町末～江戸時代)伊豆市・修禅寺

南伊豆町中木の薬師堂に伝えられた弘法大師像(写真2)も不思議な魅力に満ちた像。像高41.6cm。伊豆特産の伊豆石の塊から彫り出された像ですが、朗らかであどけなくすら見える小さな頭部に比して、体が大きくたくましく、なかなかの肉体派です。袈裟に書き込まれた梵字も見どころです。



2. 弘法大師像(江戸時代)南伊豆町・中木地区

下田市須原の薬師堂は楽しい仏像の宝庫。その中にあって代表格は地藏菩薩像(写真3)です。像高20.3cmで、まるで杓文字かこけしのような姿。でも、胸には腕の痕跡らしきものがあり、やはり仏像なのです。どこまでが木片でどこからが仏像なのか。そんな哲学的な問いすら浮かんでしまう、魅力的なお像です。

同じ須原の薬師堂から発見されたのが(写真4)のお像。最初は単なる木片かと思いましたが、目鼻があるのに気付कि、仰天しました。像高は14.4cm。片手を上げ、他方を下げる姿から誕生仏と分かります。誕生仏は釈尊が誕生した際、七歩歩んで天と地を指し「天上天下唯我独尊」と宣言したとされる姿。釈尊が生まれた4月8日の花まつりで甘茶をかけてお祝いする仏像です。甘茶をかけるので、水分で傷まぬよう誕生仏は銅製が普通ですが、このお像は木像。そしてとてもユニークな姿。本展は、江戸時代の魅力的な仏像に出会える展示会です。

(田島)



3. 地藏菩薩像(江戸時代)
下田市須原地区



4. 誕生仏(江戸時代)
下田市須原地区

開催中の展覧会では第1展示室中央に造作壁を設置、周囲の壁面では梅原龍三郎、安井曾太郎、須田国太郎の初期作品を紹介しています(写真1)。



1. 展示風景
2. 写真「関西美術院にて」1907(明治40)年、個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

展示のはじめにご紹介するのは梅原自身が所有していた写真です(写真2)。19歳頃、関西美術院で撮影された写真ですが、梅原の右奥には逆光気味に安井曾太郎が映っており、同じ京都で同年に生まれた二人の少年が切磋琢磨して画家を目指す様子が垣間見えます。その横には20歳でフランスへ渡った梅原がパリ到着日に記した滞欧日記を展示しています(写真3)。「七月二十日朝十時半巴里Gard de Ryonに着く安井君津田君の顔が見えてうれしい」とあり、リヨン駅まで先着の安井曾太郎、津田清楓が迎えに来ていたことが分かります。そして四人馬車でホテルへ向かったことが記されており、20歳の画家たちが異国の地で自らの芸術を探究しようと夢見る様子が目に浮かびます。梅原はその後、ルノワールに出会い、その芸術と人柄に魅了されますが、一方で興味を抱いていたのが演劇でした。展示中の滞欧ノートにはパリの劇場コメディ・フランセーズのチケットなどが貼られ、俳優の名前やコメントも記されています(写真4)。梅原は4年後にシベリア鉄道で帰国するとき、実は「畫家をやめて、演劇演出方面に進出しようとの考えをいよいよ固めていた」といいます。「ところが、日本に上陸してみると、人は総べて畫家として迎え、むしろ畫家たることが抜きさしなくなつていた」。そして、画家としての道を歩むこととなったと梅原自身、後に記しています。梅原の大らかな表現の裏には、画家という道にとらわれない広い芸術への視野がありました。



3. 梅原龍三郎『滞欧日記』1908(明治41)年、個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)
4. 梅原龍三郎『観劇日記』1910(明治43)年、個人蔵(梅原龍三郎旧蔵)

梅原や安井より3歳年下の須田国太郎は京都に生まれました。須田は17歳頃に独学で絵を描き始めます。ちょうど京都に書店・丸善が出来た頃で、そこで見たゴッホに強い印象を受けたといえます。その後、京都帝国大学(現・京都大学)、続いて大学院で美学美術史を学び、第一次世界大戦が終結するとスペインに渡ります。同地のブラド美術館などで模写をする傍ら、風景画を描いたり、持参したカメラで撮影をしたりしました。当館では須田国太郎が帰国後に紙焼きしたと思われる約100枚の滞欧期の写真資料を所蔵しますが、中にはスケッチと対照となる彫刻を撮影した写真もあります(写真5)。スペインのサラゴサ州にあるピリャフェリチェの写真(写真6)は、今回の調査



5. 須田国太郎の撮影による滞欧写真とデッサン《聖母像、サン・ヴィセンテ聖堂》



6. 須田国太郎『滞欧期写真』1922(大正11)年撮影(紙焼日不明)
7. 須田国太郎『ピリャフェリチェ グロカ附近(スペイン・サラゴサ)』1922(大正11)年、三之瀬御本陣芸術文化館、8.0×10.5cm(画像出典：展覧会図録『須田国太郎の芸術——三つのまなざし』公益財団法人きょうと視覚文化振興財団、2003年)

で1922(大正11)年10月4日に撮影されたことが分かりました。現在、三之瀬御本陣芸術文化館が所蔵する滞欧期に紙焼きされた同じ構図の小さな写真(写真7)の裏面には、「憲兵が来て撮影許可をもって居られるかと聞かれ」た、と撮影時の状況が記されています。当館所蔵の写真(左右反転)は中央のみがトリミング、拡大の上、紙焼きされており、どこか須田自身の風景画のように空が狭い構図となっています。須田はおそらく帰国後も滞欧期写真をプリントして研究を行い、あるいは写真に芸術性を求めたのかもしれませんが。

第2展示室(写真8)には梅原、安井、須田の円熟期の作品も展示しています。これらと初期作品を比較すると、一見、回



8. 第2展示室の展示風景

り道にも見える若き画家の模索は、豊かな実りを育むための大切な準備期間であったことが分かります。(土森)

白い狐にまたがる女神像。豊満な姿の女神は、玉眼を入れた目を弓なりに細め、目尻には笑い皺が刻まれています。かすかに開けた口元からは歯がのぞき、笑顔はじけるご機嫌な様子です。女神が乗る狐も笑うかのように目が弓形になり、太い尾を失っているものの、両足は反りあがる下半身に従って高く上がってなんとも愉快的な姿です。

失っているといえば、狐の頭に楕円形の痕跡がありますが、このあとをたどると、首の太い皺につながっています。皺のように見えるのは実は巻き付いた蛇。茶枳尼天を描く仏画を見ると、首に蛇が巻き付き、蛇の頭部を狐の頭上にあらわすものがあります(当館学芸員・櫻井和香子による)。

狐の頭の楕円形は蛇の鎌首が欠損した痕跡なのです。茶枳尼天といいましたが、よく知られた名でいえばお稲荷さまです。稲荷神には二系統があり、神道のそれは白い狐に乗る老翁。仏教では女神で、本像は仏教のお稲荷さまです。

本像は伊豆の最南端、南伊豆町石廊崎地区の正眼寺の境内、本堂向かって左手の高台にある般若堂の本尊。本像



茶枳尼天像(室町後期～江戸前期)南伊豆町・正眼寺 総高28.1cm

に関し、ご住職の奥様から興味深いお話をうかがいました。このお像は古来、漁師に篤く信仰されてきたのだそうです。かつて石廊崎は漁港として栄え、ボラ漁が盛んでした。その頃、地元の漁師は、年の初めの漁の帰り、その日獲れた一番大きなボラと、二番目のボラを、この像にお供えたのだそうです。そういえば同じ南伊豆町内で、かつて漁師が崖の上の不動明王像に新鮮な力

ツオを供えていたと聞いたことがあります。仏像に鮮魚とは不思議ですが、いつも見守ってくれている神仏に一番良いものをお供えしたいのは人情。漁師にとってそれは、苦労して獲ってきた魚なのでしょう。このお像を高台の般若堂から運び下すとき、はるか下に石廊崎漁港が見えました。(田島)

※本像は9月23日まで開催の企画展『伊豆 民間仏めぐり』で展示公開中です。

ミニ図録発行のお知らせ

企画展『伊豆 民間仏めぐり』のミニ図録を刊行しました。カラーページには、仏像好きアナウンサー、インフルエンサーとして活躍中の久保沙里菜さんに楽しい一言コメントを寄せてもらいました。美術館受付にて販売中です(800円)。

※久保沙里菜さんがパーソナリティーをつとめるSBSラジオの情報番組ラジオイーストは毎週土曜日11時～0時55分放送。毎月第4土曜日には当館学芸員が出演する「なむなむ仏像講座」も放送。過去放送分は以下のアドレスの特設HPでお聞きいただけます。

<https://www.at-s.com/sbsradio/namunamu/>



久保沙里菜さん



上原美術館ではこの度、鐫木清方《不動の瀧》を新たに収蔵しました。

画面には、上部から勢いよく一直線に流れる滝。それに手を伸ばす左側の女性は履物を脱ぎ、足を水に浸しています。彼女の表情は見えませんが、その心地よさは見ている私たちにも伝わってくるかのようです。その右横に立つ女性は、手拭いを手に通り抜ける風を、目を細めて気持ちよさそうに受け止めています。投げ出された日傘からも、2人は日差しが強いなか、滝までたどり着いたのでしょう。水の冷たさが暑さをすっと取り除き、清涼感を運んでくるようすが感じられます。

清方が《不動の瀧》を描いたのは83歳頃。清方は晩年、「市民の風懐にあそぶ」と称して、明治時代の庶民生活を数多く描きましたが、本作もその一つです。

この作品を含め、当館が収蔵する鐫木清方の日本画作品は、11点となりました。その大半が美人画ですが、清方

自身が少年時代を過ごした明治の築地界隈の情景が描かれている卓上芸術の名品《築地川》も当館で収蔵しています。いずれも、詩情あふれる筆致で描かれた穏やかで、品格高い清方作品を収集しています。

これは、コレクションを築いた上原昭二氏の好み色が濃く反映しています。上原コレクションは、もともと個人宅に飾る絵画であったため、派手ではなく落ち着いた色調があり、かといって暗すぎないものが選ばれてきました。個人コレクションゆえに小振りな作品が多くを占めますが、小さい中にも洗練された、味わい深い作品があるのが特徴です。この特徴は、清方が描いた穏やかで、品格のある作品に非常に調和するので、作品との出あいを大切にしながら、当館では清方作品を少しずつ収集してきました。

この清方の収蔵作品の一部が、鎌倉市鐫木清方記念美術館の特別展『美はすぐそこに——主情派・鐫木清方』(会



特別展『美はすぐそこに——主情派・鐫木清方』風景
鎌倉市鐫木清方記念美術館より

期：2025年5月24日～6月29日)に展示されました。「浮世絵派」といった流派で呼ばれることに違和感を覚えた清方は、自らの芸術を江戸から続く従来の浮世絵の枠組みに収まらない、情緒的な表現を重視した「主情派」と語りはじめます。清方が心惹かれたのは、市井の人々の暮らし、それも自分が慣れ親しんだ東京の下町の暮らしや、四季折々の町の風景でした。当館からは築地川周辺で暮らす人々の生活を描いた《築地川》、雨降る夜の姿を捉えた《待乳夜雨》、《木母寺夜雨》、満開の桜に降り注ぐ雨が描かれた《春雨》の4点をご紹介します。会場では、清方が木母寺取材したスケッチなどが展示され、清方の制作の一端がうかがえる興味深い構成となっていました。当館所蔵作品が展示された鎌倉市鐫木清方記念美術館では、清方の貴重な作品および資料を所蔵されています。晩年の清方の画室も見ることができますので、鎌倉にお出かけの際は、ぜひ立ち寄っていただきたい美術館です。

今回、当館に新収蔵された《不動の瀧》は、展覧会『であう、はじまる一画家たちの初期作品』開催期間中、近代館にて初公開されています。ぜひこの機会に、晩年の清方が描く長閑やかな夏の一場面をお楽しみください。



鐫木清方《不動の瀧》1961(昭和36)年、新収蔵・初公開 © Kiyoo Nemoto 2025/JAA2500081

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。
展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。
開催時間になりましたら、各展示室までお集まりください。
※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

授業入館

5月31日 下田市立下田中学校美術部
学芸員が下田中学校美術部の生徒に企画展の解説を行いました。下田中学校の美術部は2023年度から展覧会見学の受け入れをしており、美術に触れるきっかけ作りをしています。

調査活動

5月30日 熱海市伊豆山地域の調査

対外活動

4月14日 河津介護家族の会講演
4月17日 静岡県町教育委員長会の講演
5月10日 伊豆の国市・文化財市民講座
5月21日 下田市寿大学講座
6月7日 鑑木清方記念美術館で講演

田島整上席学芸員が4月、5月に講演を行いました。伊豆の国市・文化財市民講座では「伊豆の仏像―奈古谷の仏像群を中心に―」と題して講演を行い、地元の方が多く来聴しました。
鑑木清方記念美術館の特別展「美はすぐそこに―主情派・鑑木清方―」に当館所蔵作品が出展されていることにちなみ、土屋絵美学芸員が「上原コレクションにみる美人画」と題して講演を行いました。

国際博物館の日(5月18日)

ICOM(国際博物館会議)では5月18日を国際博物館の日として、多くの方に博物館の活動を周知し、親しんでいただくイベントを協賛館で行っています。当館も活動に賛同し、当日は無料入館として、多くのお客様に展覧会をお楽しみいただきました。

広報活動

番組収録

伊豆の魅力を紹介する番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「若き画家のまなざしから…伊豆を旅する」(リポーター八木美佐子さん)の回で、当館が紹介されました。(テレビ埼玉:7月24日、千葉テレビ:7月25日、テレビ神奈川:7月26日放映)。番組放映後はYouTubeでもご覧いただけます。
また下田市の各ケーブルテレビ局(小林テレビ設備、下田有線テレビ放送)で企画展の自主製作番組を収録、放映されました。



ギャラリートーク



授業入館の様子



介護家族の会での講演



鑑木清方記念美術館で講演



番組収録

夏のワークショップ開催のお知らせ

参加
無料1 ピカピカ金の箔でお絵描き！
—— 砂子編 ——

講師：牧野伸英先生(日本画家)
日時：7月21日(月・祝)
13時30分～15時10分(最終15時30分)
対象：5歳以上のこどもと保護者
定員：親子10組

2 初心者のためのデッサン教室

講師：小野憲一先生(現代美術作家)
日時：8月19日(火)～21日(木) 13時～16時
対象：小学5年生～高校生 3日間通える方
定員：10名

3 親子でいろあそび
いろの世界をのぞいてみよう！
——透明水彩による三原色を用いた色作りの入門編——

講師：小野憲一先生(現代美術作家)
日時：8月23日(土)
13時30分～15時10分(最終15時30分)
対象：5歳以上のこどもと保護者
定員：親子9組

会場：①～③いずれも上原美術館 アトリエ

応募方法

郵便ハガキまたはメール(info@uehara-museum.or.jp)に、①参加する全員の氏名、②年齢、③住所、④電話番号、⑤参加希望のワークショップを記入し、上原美術館までお申込みください。来館してのお申込みも可能です。応募多数の場合は抽選となります。抽選結果につきましては、メールまたはお電話にて締切りから2日以内にご連絡いたします。ハガキは締め切り日必着、メールでお申込みの方には、申込受理メールを返信いたします。申込受理メールが2日以内に届かない場合は、お手数ですが、美術館までお問い合わせください。携帯電話のメールからは届かないこともあります。申込受理メールのご確認をお願いいたします。

応募締め切り：

①2025年7月11日(火)
②、③2025年8月12日(火) 必着

お申込み先：

〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
上原美術館「イベント」係
info@uehara-museum.or.jp

お問い合わせ：

代表電話 0558-28-1228
info@uehara-museum.or.jp



昨年度の開催のようす



美術館を囲む緑も日に日に濃くなってきました。館庭を見下ろす魚籃観音の前の池からは、梅雨時期になると賑やかなカエルの声が聞こえてきます。館庭のあちこちでみかけるカエルですが、水辺だけではなく、館庭の木や葉の上で休んでいる姿もみかけます。近代館入口近くに咲く紫陽花も、休憩スポットの一つ。葉の上で風に揺られている姿は何とものどかな光景です。雨の季節、美術館で雨宿りをしながら、庭をお楽しみいただければ幸いです。

(櫻井)



ピクチャレスク陶芸 アートを楽しむやきもの ―「民藝」から現代まで パナソニック汐留美術館 2025年7月12日(土)～9月15日(月・祝)

東京・新橋にあるパナソニック汐留美術館は日本有数のジョルジュ・ルオーのコレクションを有するほか、「ルオーを中心とする美術」、「建築・住まい」、「工芸・デザイン」の3つのテーマを軸に、魅力的で多彩な展覧会を開催する美術館です。7月12日からは、近代陶芸史を色彩や質感の観点から注目する革新的な展覧会が始まります。

大正時代個人作家意識が芽生え、創作的表現としての陶が現れると、その傾向の中で民藝運動があらわれます。そうした作家はこれまでの工芸にとらわれず、絵画など多様な芸術の影響を取り込んでいきました。

本展では当館よりアンリ・マティス《鏡の前に立つ白いガウンを着た裸婦》を出品します。この作品は1951年、戦後初の『マチス展』(東京国立博物館ほか)に出品

されました。この展覧会は洋画家のみならず、日本画家や陶芸家などあらゆるジャンルの芸術家に刺激を与えた、重要な場であったことが知られています。おそらく多くの民藝の作家たちも見ていたことでしょう。本展では『マチス展』に出品された当館コレクションと、民藝の作品が出会います。展示空間ではそれぞれの芸術の新たな魅力が浮かび上がるかもしれません。

また、パナソニック汐留美術館は展示手法や照明が美しいことでも知られています。マティスと陶芸がどのような空間を生み出すのでしょうか。当館コレクションと民藝の出会いをどうぞお楽しみください。

(土森)



アンリ・マティス
《鏡の前に立つ白いガウンを着た裸婦》
1937年



河井寛次郎
《三色打葉貼文扁壺》
1961-63年頃 個人蔵

次回休館日は2025年9月24日(水)～10月3日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30～16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引